

「主の道は正しい」（10節）、だから「立ち返れ。あなたの神、主のもとへ。あなたは咎につまずき、悪の中にいる」（2節）。これが、古代北イスラエル王国の滅亡を経験して見出した預言者ホセアの結論でした。ホセアは、神に立ち返らなければ、あなた自身の中にある咎や過ちに気付くことができず、自ら身の破滅を招いてしまうことを警告しています。私たちの内に付きまとう悪…その正体をホセアは「偶像」（9節）と呼びました。それは、4節で語られているように、自分の都合に合うものを神のごとく信奉し、そこに救いや憐れみを見出そうとすることです。ホセアは、たとえ自分の都合に合わなかったとしても、私たちの必要をご存知であられる神に問い問われながら、それに聴き従う時に、人は悪の滅びの中から救い出されていくことを証しています。

犬養道子さんがサラエボで出会った一人の女性のことを書いておられます。「ユーゴスラビア内戦の最中のサラエボ。横たわっていた若い女性が、同性だからと胸を開いてみせてくれた。あらゆるところに煙草の火の痕…30人ぐらいから強姦されたという。弱り切っていた。手を取って目をじっと見つめると、彼女はこう言った。『私は、許しのところをください、と神様に祈っています』。60億が住む人の世の、新聞にも載らない、テレビも映さない、誰の目にも触れない一隅で、彼女は悪循環を断ち切ったのである。…許すというのは、戦争をして相手を傷つけ、殺すことの百倍も千倍も勇気がいる。『許す勇気をください』と祈らねばならない。その時の彼女の目は本当にきれいだった」。この話を、私には出来ない立派な方の偉人伝ということで終わらせてはならないと思います。目を注ぐべきは、このサラエボの女性の許しを求める祈りが、神なしでは、神を信じることなしには、神に立ち返ることなしには生まれ得ないものであったということです。あなたは何を基準に立つのか。人間の判断を越えた神の意志に立つ者であって欲しい、ホセアは訴え続けています。

それでもなお、判断を誤り、自分の都合のなかで人や物事を捉えてしまう私たちです。しかしホセアは、そんな挫折の傷を受け止め、「私は背く彼らをいやし、喜んで彼らを愛する。誠に、私の怒りは彼らを離れ去った。」（5節）と言われる神の思いを伝えています。神ならぬものを神としないために、立ち帰るべきところに立ち帰る…そんなわきまえある者となるために、私たちは再び礼拝へと帰っていきます。「あなたは、わたしによって実を結ぶ」（9節）との主のみ言葉を信じつつ…。

（文責：望月達朗牧師）

